

英語教育と題材

高橋 貞雄

(玉川大学)

1. 何のための英語教育か

私たちは何のために英語教育をしているのでしょうか。社会の人たちは英語教育に何を期待しているのでしょうか。そして英語教育を受けている子供たちはどう思っているのでしょうか。本稿は、このような素朴な問いから始めてみたいと思います。

英語教育は、文字どおり英語と教育であり、英語の教育であると解釈することができます。つまり、英語を教えることがその第一義的な使命であると考えられます。そのために、英語の文法や単語や発音の仕方などを教える必要があります。また、英語はことばですから、社会生活を営む上でのコミュニケーションの仕方を教えることもします。新学習指導要領の総則の中で、「基礎的・基本的な知識及び技能の習得と活用」ということが言われています。英語教育で言えば、英語の文法や単語や発音の仕方を習得させることが英語教育の基礎でしょう。

一方で、社会は日本人が英語を使えないということを問題にします。学校で英語を教えても英語が使えるようにならないではないか、と。そのために「英語が使える日本人の育成」といったことが日本の英語教育の課題として取り上げられます。このままでは中国や韓国に負けて、国際社会で生き抜いていけない、と脅しとも悲鳴とも言えるような圧力が英語教育に押し寄せているわけです。つまり、「活用」する力をもっとつけなければならないということです。

子供たちの視点から見るとどうでしょうか。最近、教職を目指す大学生を指導していて、学生たちが研究したいと思っている事柄にある種の傾向が見られます。それは、「やる気」とか「動機づけ」といったテーマです。中学生も大学生も、これからの社会

では英語が必要であることはわかっていますし、自分でも英語が使えるようになりたいと思っています。しかし、そこに持っていくためのドライブというか、エネルギーが足りないのです。英語の勉強は大変だし、授業はつまらないし、文法は難しい、といったトラウマが中学生や大学生の脳裏にこびりついているのです。それでも英語の勉強をして力をつけることができるのは一握りです。では、どうしたら子供たちを英語の授業に目を向けさせることができるでしょうか。英語を学ぶことや英語の授業が必要だと思ってもらえるでしょうか。

私はときどき学生に次のような質問をします。中学生のときの英語の授業で何を覚えていますか、と。多くの学生は何も答えられません。でも、ときどき、健のスピーチやムカミ（以前のNEW CROWNに登場するケニア出身の女の子）のことを口にする学生がいます。これは、中学生のときに自分の心を動かすものがあつた証拠です。逆に、何も思い出せない学生たちを目にしたとき、題材を吟味して教科書の編集に携わってきたものとしては、もの悲しさを通りこして淋しささえ覚えます。

英語教育は英語を教えることが使命であることは確かですが、英語で何を教えるのかといった視点はずっと大事であるし、もっと考えるべきだと思っています。英語教育は「教育」ですから、英語教育を通して子供たちを教育する（育てる）責任があるのです。学習指導要領のことばを借りて言えば、「生きる力」をつけなければならないということです。英語で買物ができることも生きる力にはなるでしょうが、英語の授業で感じたり、気づいたり、考えさせられたり、心をゆさぶられたりする体験をさせてあげなければ、本物の教育ではないような気がしています。そ

れを可能にするのは「題材」だと思います。

2. 学習指導要領再考

学習指導要領では、言語活動や言語材料について詳しい指針が述べられています。一方で、あまり話題になることはないのですが、題材についてもかなり詳しく述べられています。学習指導要領の指導計画の作成と内容の取扱いの教材の項目では、次のように記述しています。「…英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化を持たせて取り上げるものとし、次の観点に配慮する必要がある。

ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公平な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

イ 外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。

ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。]これらは英語教育における「教育」の面に焦点を当てて書かれているものです。英語の授業では、英語の文法や単語を覚えたり、ゲームなどの楽しい活動をする 것도大事ですが、上のような教育内容に責任を果たすとなると、やはり題材を吟味し、よりよい素材を子供たちに届けなければなりません。

3. なぜ題材を重視するのか

NEW CROWN がもっとも重視してきたことは、「人間教育」に資するということです。公教育においては、基本的にすべての生徒が英語教育を受けます。その英語教育によって、英語のコミュニケーション能力を身につけることはもちろん大切なことです。しかし、何を誰に伝えるのでしょうか。学習指導要領において、言語の使用場面の例として「買物」があります。英語教育の使用場面として、誰が何をかう場面を設定すればよいのでしょうか。子供になじみがあるという理由で、ハンバーガーを買うということではよいのでしょうか。一見些細なことのように

思えるかもしれませんが、「教育」であるならば、そこまで追求すべきであると思います。題材とは、そのくらい重要だと思います。

さて、*NEW CROWN* はこれまでにさまざまな題材を取り上げてきました。時代を見て、取捨選択してきましたが、ずっと継続している題材もあります。代表的なものは、キング牧師と広島とアリスです。なぜこのような題材にこだわるのでしょうか。そこに、教育者として子供たちに伝えたい、考えさせたいエッセンスがあるからです。キング牧師は、アメリカの歴史を知り、人権や人種差別について考えさせるのにもっともふさわしい題材です。それに、ことばの働きである「スピーチ」という点で、これほど人々の心を揺さぶる素材はあまりありません。広島を取り上げる理由は、もちろん平和です。人間は誰でも平和な社会を求めています。いまだに戦争が絶えません。戦争をやめられない人間とはいったい何なのでしょう。広島の原子爆弾を素材にして、平和の大切さをずっと子供たちに語り続けていきたいと思っています。アリスは、今学んでいる英語やイギリス文化と関係があります。アリスの作品をとおして、英語のリズムや、ことばの掛け合い(やりとり)、そしてことば遊びの伝統を、日本語や日本文化とは異なる形で体験できるのです。

NEW CROWN が大切にしてきたものの1つに「スピーチ」のレッスンがあります。ここでも、さまざまな題材を取り上げてきました。ざっと振り返っただけでも、船長になりたい、農業をやりたい、保育士になりたい、樹木医になりたい、などがあります。そして24年度版では、花火師になりたい、をテーマにしました。子供たちの視点では、これらの職業は必ずしもメジャーなものではないかもしれませんが。私たちが問題にするのは、キャリア観の育成です。自己の実現可能性としてのキャリア、キャリアの社会性、キャリアと環境や伝統、といった観点を登場人物の久美や健とともに考えてほしいのです。もちろん、スピーチのレッスンはスピーチの基本的な構造を反映させていますから、それを基にして、学んでいる子供たち一人ひとりが自分の夢を自分のことばで語ってほしいと思っています。

NEW CROWN の題材観は、*NEW CROWN* の

教育観と連動しています。私たちは、英語教育をとおして、「人間教育」「異文化理解教育」「ことばの教育」のそれぞれに責任を果たしたいと考えてきました。人間教育とは、まさに社会（国際社会）に貢献できる人間の育成です。このことは何も英語教育だけが負うべき責任ではありませんが、英語教育も責任を負っています。先ほど述べたキング牧師を代表とする人権問題、広島を素材にした平和教育、ことばと民族、環境保全の問題などは、共生の心を育てたり、思考力や判断力を育成したり、倫理観を涵養したりするうえで欠かせないことです。新学習指導要領であらたに加わった、伝統文化と自然科学も人間教育に資する領域です。当然のことながら、新しいNEW CROWNでは各学年で伝統文化と自然科学を取り入れています。いくつか紹介しておく、伝統文化としては、1年生の“Four Seasons in Japan”，2年生の“Enjoy Sushi”，3年生の“Rakugo Goes Overseas”が代表的な題材です。自然科学としては、1年生の“Field Trip”，2年生の“For Our Future”，3年生の“Learning from Nature”などがあげられます。

異文化理解教育は、とりわけ英語教育が責任を果たすべき領域です。NEW CROWNはこれまでも、そして今回も、さまざまな文化教育に資する題材を扱っています。世界にはさまざまな文化や伝統や価値観があること、そうしたことを学び理解しながら、それぞれがお互いを尊重し合う共生心を育むことが重要です。異文化理解教育の目的は、子供たちの世界観を広げることだと言えます。異文化理解の題材として、英米だけでなくアフリカやアジアを初めて扱ったのはNEW CROWNです。こうした教育観や精神は新版でも継承されています。新しく入った異文化の題材としては、1年生の“My Family in the UK”，2年生の“Aloha”，“Uluru”，3年生の“Finland— Living with Nature”，“Houses and Lives”などがあります。Finlandのレッスンは、フィンランドの自然とそれと共生する人々の暮らしをテーマにしたものですが、自然との共生という点では日本の生活に通じるものがあります。教材としては扱っていませんが、フィンランドはPISA型の教育という点で、子供たちの学力が非常に高い

ことでもよく知られています。どこかの時点で、なぜだろうかと考えてみるのもよいかもしれません。

英語教育において、もう1つ欠かすことのできない観点が「ことばの教育」です。英語教育は英語を教える教育ですが、英語を通してことばに対する感性を育てたり、ことばについて考えさせたりする教育でもあります。ことばは、ものごとについて考えたり、考えを伝えたりするうえで根幹となるものです。人間はことばをとおして社会や周りの人と関わります。ことばには、母語や第2言語や外国語などのいくつかの層があります。そうした、ことばと社会の関係や、一人ひとりのアイデンティティを確認するのもことばの教育です。NEW CROWNはケニアやインドなどのことばを考える機会を提供してきました。そうした地域の言語事情を学ぶことで、自分たちの言語社会がよくわかるわけです。

そもそも日本人が身につけるべき英語はどのようなものであるかについて考えることも大切なことです。私たちは、日本人が身につけるべき英語は、母語話者の英語ではなく、国際語（国際通用語）としての英語である、と考えています。それが国際社会においては妥当であるし、実際にそうならざるをえません。NEW CROWNには登場人物として、英語の母語話者、第2言語話者、外国語話者が登場します。彼らの言語使用状況が、まさに現在の国際社会で英語が使われている実態なのです。また、ことばは「力」を持っています。ことばによって、人は勇気をもったり、楽しんだり、傷ついたりします。そうしたことばの力を題材にしたのが、3年生の“My Favorite Words”です。さらに、3年生の最後の“English for Me”というレッスンでは、登場人物が3年間学んできた英語について振り返り、それぞれの考え方を寄せ書きにしています。もちろん生徒一人ひとりも自分の学習を振り返り、自分が学んだこと、将来の抱負を語ってほしいと思います。これもことばの教育の新題材です。

4. 「読むこと」の意味

ここまで、英語教育における題材の扱いについて述べてきました。あるテーマや題材にアプローチするもっとも一般的な方法は、読むことを通して行わ

れます。今までの教科書にはいわば「本文」というものがあり、そこで文法や単語や題材が総合的に指導されていました。今回の改訂では、もう少し読むことに焦点を当てるべきではないか、と考えてUSE Readというセクションを設けました。ここで理解する力、読み取る力をしっかりと鍛えたいと思っています。文章には、メール、新聞、スピーチ原稿、物語など、さまざまなジャンル(テキスト・タイプ)がありますし、パラグラフなどの英文の構造もあります。英語力をつける上で大事なことはよい英文にできるだけ多く接することです。場合によっては暗唱してみることも大切です。こうした体験は英語のインプットとなり、やがては書いたり話したりする原資となります。もちろん、学んで知識を得たり、考えたり、感じたりする素材でもあります。

5. 新しい指導法の台頭

ここで、新しい指導法の流れを2つ紹介しておきたいと思います。結論から言うと、すでにその多くが、またはその一部が、中学校の英語教育の中で実現されていることでもありますが、今後の傾向として注目していったほうがいいと思います。

その1つは、内容中心の指導法(Content-based Teaching)です。この指導法は1970年代に登場したコミュニカティブ言語教授法(Communicative Language Teaching)の派生形または発展形の1つとして認められるようになったものです。初期のコミュニカティブ言語教授法は、「言語機能」に焦点を当てすぎるあまり、「phrase-book language」の指導であると批判されることもありました。そこで、コミュニケーション能力の育成を柱としつつも、言語は「内容」(contents)を土台にして教えるのが効果的であると考えられるようになってきました。内容中心の指導法で最も強い形態は、学校の教科科目を目標とする言語を使って教えるイメージ教育や特定の目的のための英語教育(ESP)などです。日本の中等学校における英語教育の多くは、このような指導形態をとりませんが、各単元を題材シラバスで編成している教科書では、内容中心の指導法の弱い形として実践されていると考えられます。

もう1つ、近年注目され始めているのが、内容言

語統合型学習(CLIL: Content and Language Integrated Learning)です。この学習法はヨーロッパではすでによく知られている学習原理ですが、日本ではまだ紹介し始められた段階にあると考えられます。原理としては、内容中心の指導法と類似している点が多いのですが、ポイントは「内容」と「言語」を統合することです。CLILの関連で、フォーカス・オン・フォームという考え方が言われていますが、ただ目標とする文法を教えるということではなく、ある内容を持った英文に取り組む中で文法や表現に意識を向けさせたり、気づきを促したりする手法です。このような最近注目されている指導法に共通して言えることは、コンテンツ(題材)がしっかりといて初めて成立する指導法だということです。

6. 題材重視の授業を成功に導く原理

英語教育では題材が重要であるということを論じてきました。ここで留意してほしいことが1つあります。それは、題材は英語教育、すなわち英語の授業の中で取り扱われるべきだということです。たとえば、キング牧師の公民権運動やインドの社会生活は、道徳や社会科の中で教えることもできます。英語教育として扱うためには、スピーチや日常の言語生活に焦点を当てる必要があります。あるいは、人物伝としての英文を読み取る、といった観点が重要です。題材を重視した授業を成功させるためには、題材をつけたしや補足にするのではなく、題材の扱いそのものを授業の一部として組み込むことです。

7. 未来を担う子供たちのために

日本も世界も人間の生き方について、将来の生活について、自信を無くしているように思えます。しかし、未来を担っていくのはまぎれもなく、今、そしてこれから勉強していく若い人たちです。平成24年度版NEW CROWNの編集理念の冒頭は、「英語教育をとおして、確かな学力、豊かな心と、地球市民(世界市民)としての資質を備えた人間を育成する。」です。私たちが用意した教材をとおして、生徒たちがどのように考え、どのように成長していくのか、見守っていきたいと思います。